

長岡京は本命の平安遷都前の方に合わせで、たった十年ばかりの都だったという印象しかない。

しかし、昭和29年頃から一部の奇特定の研究者によって発掘調査が始まり、37年の大極殿跡の発見、42年の内裏内郭築地回廊の確認、54年の内裏南方の重要官衙遺構の大規模な築地堀の発見などによって、この京が未完成で放棄された定説と異なり、平城京、平安京と並ぶ京域を持つ都であったことがわかってきた。

その規模は南北5・3キロ、東西4・3キロ、京都市の南、桂川と西山に挟まれた律令制下の乙訓郡で、京の大部分は現在の長岡京市になるが、中心部の内裏や大極殿などは長岡丘陵の南端に位置し、現在の向日市の中にある。大極殿址近くの向日神社を訪れると、丘陵の端部で直ぐ急斜面になった高台であることが実感出来る。また京域の東には桂川、東南には巨椋池が広がり、また南端には難波津へと続く淀川が流れ、京の表玄関口にあたる山崎津や淀津の港があった。

長岡京建設に当たっては、この淀川を利用して難波宮を解体した資材を運んだため短期間で建設が進んだといわれる。それは出土した瓦が難波宮と同じことから分かる。

長岡京は平城京と同じように、南北方向の大路が右京・左京にそれぞれ4本ずつひかれ、東西方向の大路は、九条まで造られたことがわかっており、東西の市が立ち、役所や役人の邸宅が身分に応じて割り当てられ、短期間の間にその6割が都城として整備された。

遷都の理由は、奈良時代後半に相次いだ皇位継承をめぐる陰謀、謀略による政情不安から人心を一新するためといわれる。また称徳天皇と弓削道鏡の事件から見える仏教勢力の政治への介入を避けるためであったといわれる。特異なものでは、大仏製作時に施した金メッキに莫大な水銀が使われ、発生した蒸気による中毒で都に多数の死者が出たとする説なども語られるが、遷都の真相は詳しくはわからない。

長岡が選ばれた理由は、『続日本記』に「水陸の便あるを以て都を茲の邑に遷す」とあるようにこの地は、宇治川、木津川、桂川の三川が合流して淀川となり大阪湾に繋がる場所で、水運が大きな比重を占める古代にあっては、京として優れた土地であることは明らかである。

さらに当時大きな力をもっていた新羅系渡来人の秦氏の本拠地が、近くの山背国であったことも見逃せない。秦氏は河川灌漑技術に優れ、造宮使を務めた藤原種継は母が秦氏の出身といわれる。

長岡京を築き、平城京からの遷都を行なったのは桓武天皇である。

天智系の光仁天皇を父に、渡来系の和氏の高野新笠を母に持つ桓武が即位するのは781年、長岡京遷都を784年に行っている。遷都の翌年、交野において日本最初の天帝祭祀を行い、大和を核にしてきた王権を否定して父・光仁が新王朝の始祖であることを宣言、同時に遷都の正当化も行った。

しかし、新京造営中のその年に、造宮司藤原種継が大伴継人らによって暗殺されるという事件が起こり、同母弟の皇太子・早良親王が連座していたとして乙訓寺に幽閉され、後に淡路島に配流の旅の途中で死去する。この事件を契機に皇后や天皇の母の病死、さらに早良親王を廃して立てた皇太子の安殿親王が重病になるといった不吉なことが続き、桓武天皇は早良親王の怨霊に悩まされることになる。

さらには水害が追い討ちをかける。河川が合流する交通至弁の地形は、当然ながら河の氾濫で洪水が発生し、都は何度も水害に見舞われた。792年には「式部省南門が雷雨で倒壊」などの記録もあり、ついに長岡京は遷都後僅か10年の延暦13年(794) 廃都となり、都は平安京に遷されるのである。

遷都は和気清麻呂の建議によるもので、平安京造営も彼の力に負うところが多い。

